

ゾンビとの出会い

飄

々

広報委員

岡山 智亮

おどろおどろしいタイトルですみません。私が大学生のころ「ドーン・オブ・ザ・デッド」というゾンビ映画に出会い、ゾンビに対する想いを一変させられてしまいました。振り返って考えると、私が小学生のころに「キョンシー」という香港産のいわゆるゾンビ映画が大ブームを起こし、当時テレビでよく見ていましたし、「キョンシーごっこ」が学校でも流行っていた記憶があります。また、高校生のころには「バイオハザード」というゾンビを題材にしたテレビゲームが流行し、私もプレイしていました。こうして人生に何度かゾンビと出会ってきた記憶はありましたが、そのころはゾンビを単純に怖いものとして捉えていた程度だったと思います。ではなぜ「ドーン・オブ・ザ・デッド」で想いを一変させられたかという点、内容としてただ恐怖だけを煽るのではなく、窮地に置かれた人々の心の動きをわかりやすく描いていたからです。単純にホラー映画としての面白みもあるのですが、人間ドラマとして楽しめる要素も十分にあり、当時ゾンビ初心者であった私にゾンビというものを改めて考えさせてくれるきっかけを与えてくれました。もちろん「ドーン・オブ・ザ・デッド」以前に作られた作品にも人間ドラマを描いたものは数多くありますが、私にとってのきっかけはそれでした。

ゾンビ映画でよく描かれる人間ドラマの要素として私が特に興味深く感じるのは、ある登場人物の大切な人がゾンビに襲われたとき、その襲われた人が今後ゾンビになってしまうのがわかっている中でも傍で付き添う登場人物の心の葛藤を描いている場面です。作品によってもその描き方は

いろいろですが、どの作品でもなんとも心をかき乱されます。大切な人との別れにはいろいろあると思います。病気であれば故人との別れに涙を流し、悲しむ時間がありますが、ゾンビ映画の場合そうはいきません。大切であった人がゾンビとなれば自分を襲ってくるわけで、そこは自分を守らないといけないという絶対条件の中で生存者側はいろいろな対応に出ます。作品によっても設定はいろいろなのですが、ゾンビに襲われてから、実際にゾンビになってしまうまでの時間設定が重要になってきます。時間設定が長ければ、ゾンビになるのがわかっているものの、意識がしっかりしている時間がそれなりにあるので登場人物の心の葛藤がより複雑になります。逆に時間設定が短い場合、考える余裕もありません。時間がない中で重大な決断（大切な人に自分で手を下さないといけないなど）をしなければならない登場人物の心理状態に心が詰まります。

別の視点からゾンビ作品の興味深いところとして「走るゾンビ」「走らないゾンビ」とがあることです。そもそもゾンビの定義としては、何らかの力によって死体から蘇った人間の総称とWikipediaには記述があります。そんな中、ゾンビ映画の第一人者であるジョージ・A・ロメロ監督は「死体はゆっくり動く」と定義したため、以降の作品でもゆっくり動くゾンビが定番であったようです。そんな中、日本で2003年に公開された「28日後」という映画は当時としては常識を覆すものであったようです。そこで描かれているゾンビ（正確には人間の精神を数秒で破壊する新種のウイルスに感染した人間）は全力疾走で追い

かけてきます。しかも集団で。他の映画で「走る」ゾンビを観たことはあったものの、「28日後」で表現されているゾンビの全力疾走にはうまく言葉にはできませんが、何かとてつもない恐怖を感じさせられました。「走る」「走らない」に関してはゾンビファンの中でも意見が分かれるところがあります。そんな中、私個人としては、「走るゾンビ」映画を好んで観ています。まずゾンビに走られると生き延びる難易度がかなり上がります、そのハラハラ感とはんてでもないです。また、「走るゾンビ」も常に走るわけではありません。生存者が臨戦態勢にないゾンビに見つからないように潜むシーンにも、ものすごく緊張が走ります。このようにゾンビが走れるとなると、映画のスピード感にメリハリが出てストーリー的にも面白くなっているのではないかと思います。もちろん、「走らないゾンビ」にも魅力はあります。ゾンビの集団にゆっくり追い詰められていく緊張感や、静かにゾンビが迫ってきて、気づいたら背後に立っているという場面が定番であり、そういったシーンは「走るゾンビ」では描きにくい表現かと思います。また、ゾンビ映画を含めホラー映画の中で生々しい描写に特徴のあるものを「スプラッター映画」と分類されます。私はゾンビ映画が好きなもののあまり生々しい描写が得意な方ではないですが、ゾンビ映画を好む人の中にはそういった生々しい描写をどう描いているかに興味を持っているファンもいます。そういった人たちからするとスピード感がありすぎる「走るゾンビ」よりも「走らないゾンビ」の方が好まれる傾向にあるかもしれません。

ゾンビ映画ファンはよくゾンビの世界が現実となった場合、自分であればどう生き抜くかを想像する傾向にあります（人類がどのくらいの期間生き残れるかを算出している統計学の専門家もいるようです）。私もよくいろんな場所でふと想像してしまうことがあります。それが想像の中だけであればよいのですが、ここ最近それに近い状態を肌で感じたことがありました。それがCOVID-19の流行です。ゾンビ映画では元々は生存者対ゾンビの構図で話が進みますが、時間の経過とともに生存者対生存者の構図が描かれます。物資の不足、人種差別、思想の違い、居住スペースを守るための縄張り争いなどが主として描かれます。COVID-19流行からの数年間では今となっては信じがたい現実を数多く経験しました。得体の知れないものに対して各々が恐怖し、またその恐怖がいろいろな情報をもとに増大し、人々が分断されていく。映画で描かれているようなことが現実となる恐怖感を肌で感じました。そういった意味ではこの度の新興感染症流行の経験は今後に活かしていかなければならないものだと思います。新興感染症のみでなく大規模な自然災害、そういったものに私たちが出くわした際、不安な感情を心の中で少しでも増大させず冷静な行動がとれるよう普段からの心づもりを大切にしようと思います。

自動車保険・火災保険・交通事故傷害保険

医師賠償責任保険・所得補償保険・傷害保険ほか

あなたにしあわせをつなぐ

損害保険ジャパン株式会社 代理店
共栄火災海上保険株式会社 代理店

山 福 株 式 会 社

TEL 083-922-2551